

かぜ・インフルエンザ③



かぜやインフルエンザが恐ろしいのは、病気そのものもさることながら、命にかかわる合併症を引き起こす原因になるからだ。中でも怖いのが肺炎だ。肺炎は日本人の死亡原因で、がん、心臓病、脳卒中に次いで第4位、全体の約9%を占める。社会の高齢

化に伴い増加傾向にあるので、くれぐれも注意が必要だ。

「鼻や口から吸い込んだ空気は咽頭（いんとう）や喉頭（こうとう）、気管支などを通して肺に達します。この空気の通り道を気道といいます。喉頭までの炎症がかぜ、気管支にまで及んだものが気管支炎、肺の奥の肺胞にまでウイルスが入って炎症を起こすのが肺炎です」と、中田クリニックの中田紘一郎院長は説明する。

肺炎の原因となる

病原体のうち最も多いのが「肺炎球菌」で、日常生活で病原体に感染して起こる「市中肺炎」の約4分の1、60歳以上の肺炎の半数近くを占める。

この「肺炎球菌性肺炎」は他の肺炎に比べて重症化しやすく、細菌が髄膜に感染して髄膜炎を起こすこともある。これは命にかかわる疾患なので、くれぐれも要警戒だ。

特にかぜやインフルエンザの流行するこの時期は、気道に炎症を起こしている人が多

く、肺炎球菌に感染する危険性も高まる。

「肺炎球菌性肺炎を防ぐには、かぜやインフルエンザにかからないように注意することが大切になります。できればインフルエンザと肺炎球菌のワクチンを両方とも接種するのがおすすめです」と、中田院長。

両方のワクチンを接種すると入院リスクは36%、死亡リスクは57%も軽減されるという。65歳以上の人、心臓、呼吸器に慢性疾患のある人、腎

不全、肝機能障害、糖尿病、脾臓（ひそ

う）を摘出した人などは特に接種を心がけたい。

（メディカルライター・山下 了一）

◇中田 紘一郎（なかた こういちろう）中田クリ



ニック院長。順天堂大学医学部客員教授。虎の門病院呼吸器科部長、東邦大学

医学部呼吸器内科教授などを経て現職。日本呼吸器学会指導医・専門医、日本感染症学会指導医・専門医。

毎週土、日、月曜掲載

命を脅かす合併症の肺炎